

五才児の活動と教育内容の一環

関 治 子

五才児になると、幼稚園の生活経験がひろがり、幼児の活動も多面性をもってくる。

今年度は、オリンピック東京開催という、社会での特別の出来事があった。幼児の活動と教育内容が、社会の事象と非常に密接であって、社会事象と相まって、一つの流れをもっているという観点から、第一にかいてみようと思う。

第二は、幼稚園生活のしめくりともいえる卒業前の幼児の活動と教育内容の一環を記して、ここに幼児の発意をいかして、総合的な指導を進めていくことなど、ふれてみたいと思う。

一、社会事象との一環

運動会前後のリレーあそびが、テレビによって、各地の聖火リレ

ーが報道されてから、聖火リレーごっこになったのが、オリンピックあそびの第一歩である。オリンピック開幕と同時に、日に日に、幼児の活動は、オリンピックの影響がつのるばかり、そこで、その頃にと計画していた動物園ごっこを十一月にずらすことにした。十月九日の聖火リレーごっこに始まって、十六、七日頃に最高潮に、閉幕後の二十八日位まで、約二十日位、オリンピックごっこともいふべき活動の一環があった。

この間、強く感じたことは、幼児は、直接的に捉え、すぐに行動に移すことで、たとえば開会式をみれば、翌日はすぐにプラカードを一人がつくって持って、行列をつくり行進をする。重量あげが始まれば、重量あげ、体操が始まれば体操というように、時を移さず、行動にあらわす。おかし入れの製作物にまで、聖火台と聖火を模したものをつくったりした。二十日位の流れの中から、幼児自身のあそびの形となってしまうと、二月、三月までもあそばれているバスケット・サッカーあそびもある。

「ある一日」(十月十七日)

前日にひきつづき、登園した二、三人で、重量あげのパーベルつくりが始まる。組板で、ちょうど使い易い大きい大きさのできる。昨日よりは、組板の円の数をふやしていく工夫ができたので、実際に重さを加えていく。重さが加わると危険にもなるので、広く場所をとってすることなど指示すると、まわりに客席をつくり始め、観客

バスケットごっこ



には女兒が大分入ってきた。今日は、点数をかいたものをおかけ、手に粉をつける場所をつくった。あそび方に、進歩、工夫がみられる。

砂場のグループは、棒高とび・走幅とびをはじめた。これも前日のつづきであるが、助走距離が長くなったり、木の枝を棒にして、走り、杖をつくようにしてふみきったりしている。

一方、サッカーをみてきた子どもが、何となくそれらしいあそびをしている。当の本人は、「僕、サッカーみてきたよ」と得意顔。

「あ、そうだ。サッカーしよう」とすぐに反応のある子ども、また、全然わからない子どももいる。そこで、教師も入って、子どもの知

サッカーごっこ



識と折りませながら、ゴールをつくったり、ゴールキーパーをおいたり、コート成形つくるなど、ごく簡易な準備やルールをきめつつ、共にあそぶ。

こうして、非常な興味を示して、工夫してあそぶグループと、そういうことに、関係なくあそんでいるグループなどあったが、教師

としては、それぞれのオリンピックあそびを含めたり、共にあそんで過した。

この日は、十月の身長体重測定をうける。皆が、こうしてあそんでいる中から、お当番が指図をして、身体測定と、自由あそびとが並行していく。男児・女児と交代する。組全体一斉ではないが、教師とお当番との連絡により、後片づけも並行して始まって、協力し合い、皆同時に終って、今度は帰りの支度をする。

また、別の「ある一日」には、やはり、継続したオリンピックあそびに、メダルづくりが始まって、教師としても、金・銀紙をだしてあげたり、余り関心を示さない子どもも加わってくるように、材料を出してみたりする。今度は、皆で揃って、ゆうぎ室にいき、音楽に合わせて、オリンピックの各種目の表現をやってみる。中でも、子どもの側から床運動と声がかかる。きれいな音楽に合わせ、思う存分、好きに動きまわる。

終りの頃、一番印象深いところを、絵にかかせる。開会式・重量あげ・マラソン・サッカー・ホッケー・バスケット・馬術・体操などのうち、女子体操は、赤のユニホームで、金髪の人や逆立ちなど、本当によく特徴を捉え、楽しんでかいていた。

このようにして、特殊な例ではあるが、こういう社会事象が自然に、幼児の活動に入りこんで、だんだんに整理のない形で、組全体にひろがり、共に一つの経験として味わって、また遠のいていく、実に自然な一つの流れであった。

二、卒業前の幼児の活動と内容の一環

卒業を前にしたひなまつりに、年長組は、例年、劇や楽隊などをしていく。

二月十日頃から、教師の計画によるこの活動の一環が始まった。年長組二組合併のうた・楽隊も、曲をきめて、うたい始めた。

組でする劇

などのために
題材をきめて
いくべく二つ
の話をする。

(めんどりと
パン・大きな
かぶ)

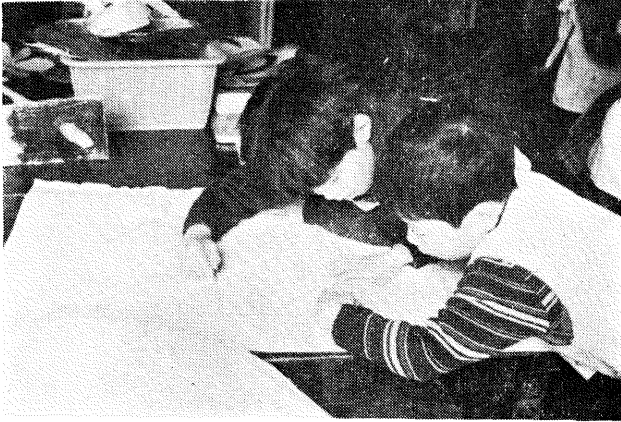
十一日、合
併で、楽隊を
やり始める。

楽隊の役割を
きめる。希望
による。人数
が多すぎる所
は、話し合い



劇の相談

小道具づくり



小道具できあがり



か、じゃんけんにより、他の役にまわる。

十二日、劇にした場合の雰囲気をつえながら話をして、子どもたちに、前者の二つの話から、どちらを劇としてやりたいか選択させた。大半が、「大きなかぶ」がよいという。グリム童話をよみ、ロシア民話の大きなかぶの絵本をみせ、結局、ロシア民話の大きなか

ぶを劇にすることになった。

(ここで、教育実習・かぜ流行などで一週間ほど、中断してしまい、三月十日にこの会をもつことになった)

二十日、劇の方は題材がきまったが、もう一つを、絵話のようなものにしてはと考える、「小さいお家の話を、本の絵をみせながら、

もちかけてみる。これは、話の理解としては、むつかしいと思うのだが、でてくるものが、ビル建築とか乗物で、身近に見聞きするものであることと、子どもが製作にとりかかり易いことを考慮して、絵話の形式で、絵の部分を大きくつくって、そして、言語的な表現をするようにした。

二十二日、二十六日いろいろの事情で間がとぶがこの二日で、二者のうちどちらか一つを選ばせた。大体、その時に登場物を、子どもたちときめていった。そして、希望者からきめたのだが、今回は、卒業前でもあり、希望者のない役などは、推せんさせてみ

た。結構、子どもも適任者を見ているのだと感心した。中には、好きな人の名前ばかり言う子どももいた。推せんされた子どもが、「やってもよい」と承諾したところで、徐々に、役をきめて、黒板に役と名前をかいていった。

二十七日この日から、小道具をつくり始め、大体三日位で、主なものをつくった。できた小道具を使って、少しずつ動作をしてみたりした。

三月四日から五日間、動作・小道具の完成・せりふなどと本格的に活動を始めた。

この辺の最も白紙のところから、劇・絵話へとつくり上げていく段階で、ある一日に重点をおいてみたい。

「三月五日」

朝のうち、自由あそびの子ども、お友だちに贈るえをかく子ども、小道具をつくっている子どもと皆、てんでに、活動している。十時頃、部屋の中を広くして、一方に客席をつくる。皆が集る。今日からは、劇のグループと絵話のグループに分かれて、やってみるので、片方のグループは、みてもあそんでもよいことにする。大半がみている、一しょになって、考えてくれる。

劇の方は、単純なストーリーのせいもあるが、登場順を、教師がきめて持ちかけると、それによって、でてきた子どもが、実に、個人差があつて、どんどん、とりとめもなく考えて話す子ども、さっぱり話さない子どもという。話す子どもは、これを何回かくり返し

ていくうちに、整理していけばよいが、話さない子どもに、どうしようかと思案してしまう。

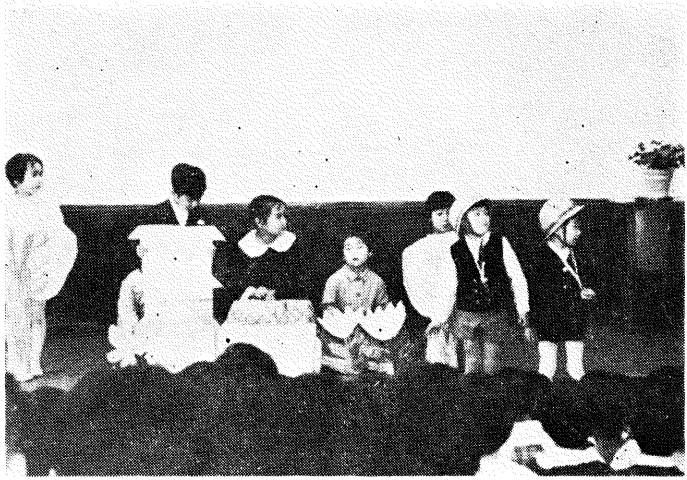
教師が、「こんなふうに言つてあげてもいいわね」という形で言つたことは、子どものことばとして、なだらかに入つていかならぬ。他の子どもたちに、「何と云つたらいいのかしら」ともちかけると、いろいろと意見がとび出す。その中から、好きな言葉を選ばせると、言えなかつた子どもも、翌日、翌々日と、だんだんに自分の言葉として、整理して話すようになる。

ことば一つでも、子どもからでたものは、こんなにも浸透していくものかと、恐ろしかったり、尊いものだと痛感した。

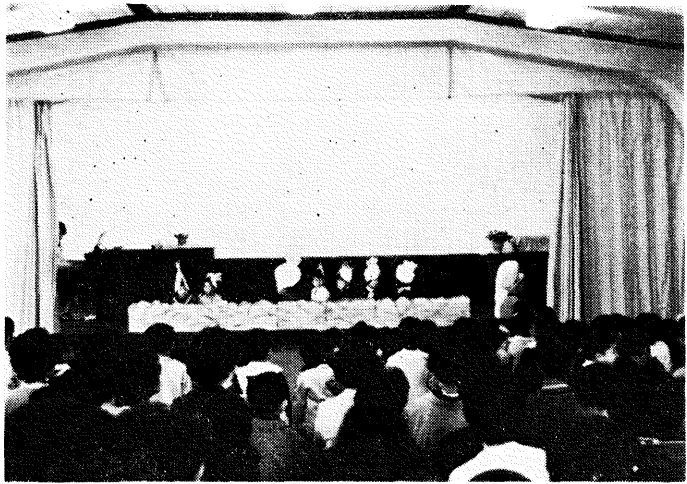
また、休んでいた子どもが、役割をえらぶのに、めんどりがでてくるところがあるのだが、「ひよこになるわ」と役を一生懸命考えたりした。この子どもにとっては真剣だったと思う。

絵話の方は、大きな絵をもって、その子どもが話す形式にしたが、こちらは、劇よりも動きが少く、言葉が多いので、次の場面へのつなぎに困つてしまった。——よく話す子ども、話さない子どもの差はやはり大きい。——すると、教師が考えていないことを、子どもが気づいた。

それは、工事場の人が、小さいお家のまわりに、大きい家を順々にたてていくのに、その度に、その工事場の人になる子どもがでてきて、「トントン」「ドルルルルル……」という。次々とたつていく、ビルや学校やデパートなどを、この工事場の人になる子ども



大きなかぶの劇



には、皆が、実に意欲的になり、協力体勢がでている。個人差があっても、助け合って、衣装をつける子どもには、手伝って着せてあげたり、また、お互いのを、よくみているので、お休みで欠員ができれば、積極的な子どもが、すぐに代役をつとめる。

ともかく、全員に、ことばを考えて言い、道具をつくり、実際に活動する機会をもった。

こうして、こういう一連の活動は、言葉が人前で言えるようになった。

小道具を一人で工夫してたという個々のことだけでなく、一つの大きな環の中にいて、一人ひとりを総合的に成長させるものではないかと感慨を深くした。

もにリードしてもらって、ピッピッと笛を吹いたら、ビルがたつと
いうようにしていけば、話がスムーズに運んでいくと、あらため
て、筋を運んでいった。

まだまだ、ほんの一部で、言いつくせないが、卒業前のこの時期